

# ベストな解を求める!

## 後工程3工場の売却決まる

函館（北セミ）、福井（RSKS）、熊本（九セミ）の後工程3工場のシェイデバイスへの譲渡について、3月19日に最終契約が締結されたとの発表がありました。ルネサスは国内に小規模の工場を数多く抱えているからコスト高になっていると言われてきましたが、譲渡先のシェイデバイスは、2009年には東芝から福岡と大分の2工場を、昨年末にも富士通から鹿児島、会津、宮城の3工場を譲渡されたばかりです。「不採算」と言われ、お互いに別々の生産システムを持ち、独立性の高い国内小規模工場を集めての事業運営は、それ自体が大変困難であると考えられます。シェイデバイスがこうした問題を解決し、新規顧客を開拓し、函館、福井、熊本の3工場においてもルネサス以外の製品を増やして雇用維持していける事に期待します。

## 春闘は「延長戦」に突入

3月19日に春闘の会社回答がありました。6月の一時金1.0ヶ月というルネサス労組の最低限の要求に対して、会社の回答は「ゼロ」でした。労組はこの回答を受け入れず、交渉の継続を申し入れました。その後、会社回答次第では、すべての事業所で「36協定（サブロクきょうてい）」を結ばないことなどを盾に3月25日まで交渉を続けてきましたが、現時点では「6月支給ゼロ」との回答は受け入れざるを得ないと判断し、代わりに何とか7月下旬を目処に「別途協議」に持ち込む事を目指して、最後の調整に入っている模様です。

## 下振れリスクが計画値に?

春闘と同時並行で進められている労使協議では、3月19日に2013年度の事業計画が示されました。それによると、来年度の売上規模は今年度より

りも更に1000億円強も減る計画値となっています。つい2月12日の合同労使協議では、この今年度比1000億円減は下振れリスクであると説明されていました。また、赤尾前社長も2月8日の会見で、「需要減は2013年1月から3月で底入れし、4月以降は緩やかに回復する見込み」と答えたばかりです。業績が最悪となった場合を次年度の計画値にすることの是非も問われなくてはなりません。この下振れリスクを想定して早期退職による人員減の計画を立てている事には全く納得がいきません。

## 倒産回避のぎりぎりの攻防

ルネサスが次年度以降も存続していくためには、一定量以上のキャッシュが必要であり、その運転資金確保の為に金融機関からの融資や産業革新機構からの出資が必須であるとされています。ところが産業革新機構からの出資は未だ確定ではなく、売上規模に見合った水準まで人員削減を行うことを出資の前提条件とされています。早期退職の実施か、さもなくば倒産か、二者択一を迫られる中で、労組としても早期退職の実施に理解を示さざるを得なかった事は、背に腹はかえられぬぎりぎりの選択だったと考えられます。

## ルネサス懇

ルネサス関連労働者懇談会 2013年3月26日  
E-Mail: renesaskon@gmail.com  
Web: <http://www.renesaskon.net/>  
住所: 〒105-004 東京都港区新橋4丁目24-3  
エムエフ新橋601号 電機労働者懇談会気付  
TEL & FAX: 03-6540-1777

ひとりでも入れる労働組合

## 電機・情報ユニオンに相談を

中央本部（森=090-4834-6876）  
関東地本（海老根=090-1212-9552）  
関西地本（西野=090-9714-8780）  
東京支部（米田=080-6540-7190）  
神奈川支部（中村=080-5060-7728）

## 「大吟醸酒・ルネサス」で良いのか？

原料となる米を半分以上削って、米の芯だけを使って醸造した日本酒を大吟醸酒と言います。大吟醸酒は、臭みの無い透明感と上品な芳香のある最高級の日本酒です。大吟醸酒では当然ながら、原料米を削って減らしすぎてしまいますから、造られる酒の量は米の量に比べて少なくなります。

ルネサスは、統合前の個社の時代から繰り返された人員削減によって、ここ数年の間に既に2万人規模の人員が会社を去っています。そして産業革新機構は、出資の条件として更なる人員削減をルネサスに迫っており、そのためには現在の間接人員（ホワイトカラー）の4割の削減が必要と言われていています。こうしてルネサスグループで働く労働者の数を大幅に減らし、売上規模が大幅に減っても、最終的に利益が上がれば良いと言うのであれば、それはルネサスという会社の「大吟醸酒化」とも例えられるのではないのでしょうか。

しかしながら、私たちは酒造りの米ではありません。ルネサスを離れても、何かの仕事をして収入を得て生きていかなければなりません。そしてその時には、ルネサスで培った技術もスキルも何も生きない職種で働くことになるかも知れません。それは果たして日本経済全体にとってプラスと言えるのでしょうか。更には、私たちに原材料や装置を提供して下さっているメーカー、製造や技術や事務の委託先、そして工場のライン閉鎖等によって集約となる製品を使って頂いている顧客はどうなるのでしょうか。

出資した企業が業績を改善し、利益を上げられる様になることを求めるのは、出資者として当然の事です。しかし、経済全体として縮小衰退の方向に向かっても、出資先の企業だけが利益体質になれば良いとするならば、それは民間ファンドであるKKRでさえも、そのモラルを問われて然るべき事です。まして、産活法に従い国の産業政策に基づいて発足した産業革新機構であれば、尚更と言えるのではないのでしょうか。

## 「ラストチャンス」に相応しいベストな解を求める

100%自力での再生が不可能となったルネサスにとって、今回の産業革新機構の支援がラストチャンスと言われている。ルネサスの再生が叶わなければ最終的に国民の税金で損失が補填される以上、その場しのぎの延命ではなく、中長期的な視点から会社を再生復活させていく施策こそが求められる筈です。

ところが、3月19日に会社から示された事業計画では、2014年度には早くも営業黒字が出せる絵が描かれています。2013年度は下振れのリスク込みで計画を描きながら、このコントラストは何でしょうか。融資元や出資者の意向を決して動かさない前提条件とし、単に直近での倒産を回避する事ばかりに奔走し、出来るはずもない短期でのV字回復を事業計画として掲げ、その実現のためと実態から乖離した精神論や観念論を唱えてきた事こそが、過去の失敗の大きな要因だったと言う事は無いのでしょうか。

いま私たちが望むのは、多少時間がかかってもルネサスが再生し、最終的にルネサスという会社が市場に送り出す半導体製品が社会の中で最も生きようになる道では無いかと思います。そのためにも経営陣には、現在のルネサスのありのままの実態を把握し、その上で中長期的な視点から復活する確率の最も高いと思われるベストな経営方針を模索し、そのために必要な支援を産業革新機構に要請していく勇気を求めます。そしてルネサス労組には、労使自治がこれ以上侵害されないことを念頭に、会社から真にベストと思える解が提示されるまで、4月以降も引き続き粘り強く労使交渉を継続されることに期待します。

**編集後記** 杜氏の実力は未知数。使う水も酵母も未定。そもそもどんな酒にするのかビジョンもなし。それなのに精米（人減らし）だけを先行して行うとしたら、まともな酒が出来るのかさえ疑問に思えてきます。会社説明によれば、労使で協力して何が出来るのか産業革新機構は見ていると言われますが、経営方針そのものに産業革新機構が口出しする現況にあっては、同機構と会社とが協力してベストな経営方針を示せるかどうかを、私たち労働者の方こそ見えています。そしてその監視役が出来るのは労組を置いて他にありません。